麻しん風しん混合予防接種の説明

Ｒ6.4

|  |  |
| --- | --- |
| 接種対象年齢 | 1. 期：1 歳から 2 歳に至るまで
2. 期：小学校就学前の 1 年間（いわゆる幼稚園、保育所等の年長児）
 |
| ワクチンの種類 | 生ワクチン |
| 予防する病気 | ＜麻しん（はしか）＞麻しんウイルスの感染によって起こります。感染力が強く、予防接種を受けないと、多くの人がかかる病気です。発熱、せき、鼻汁、めやに、発疹を主症状とします。最初 ３～４日間は 38℃前後の熱で、一時おさまりかけたかと思うと、また 39～40℃の高熱と発疹がでます。高熱は 3～4 日で解熱し、次第に発疹も消失します。しばらく色素沈着が残ります。主な合併症としては、気管支炎、肺炎、中耳炎、脳炎があります。患者 100 人中、中耳炎は約 7～9 人、肺炎は約 1～6 人に合併します。脳炎は約 1,000人に 1～2 人の割合で発生がみられます。また亜急性硬化性全脳炎（SSPE）という慢性に経過する脳炎は約 10 万例に 1～2 例発生します。はしかは、医療が発達した先進国であっても、かかった人の約 1,000 人に 1 人が死亡する重症の病気です。 |
| ＜風しん＞風しんウイルスの飛沫感染によって起こります。潜伏期間は 2～3 週間です。軽いかぜ症状ではじまり、発疹、発熱、後頸部リンパ節腫脹などが主症状です。そのほか、眼球結膜の充血もみられます。発疹も熱も約 3 日間で治るので「三日ばしか」とも呼ばれることがあります。合併症として、関節痛、血小板減少性紫斑病、脳炎などが報告されています。大人になってからかかると重症になります。妊婦が妊娠初期にかかると、先天性風疹症候群と呼ばれる病気により心臓病、白内障、聴力障害などの障害を持った児が生まれる可能性が高くなります。**予防接種の効果**麻しん・風しん予防接種は、麻しん・風しん混合ワクチンを用い、第1期と第2期の2回を接種することにより感染を防ぐ予防接種です。特に希望する方は単独のワクチンを接種することができます。麻しん・風しん予防接種を受けたお子様のうち、95％以上が免疫を獲得することができます。体内に免疫ができると、麻しんや風しんにかかることを防ぐことができます。2回接種することでより強固な免疫が獲得できます。予防接種は流行を防ぐ、助けあいでもあります。まだ接種していないお子さんは、麻しん風しんに「かからない」「うつさない」ために、麻しん風しん混合ワクチンの予防接種を受けましょう。 |
| 接種回数 | ２回 1 歳から 2 歳に至るまで 小学校就学前 1 年間1 期：1 回 ２期：1 回 |
| 実施時期 | 年間通して実施 |
| 実施場所 | 個別予防接種実施医療機関 |
| 注意事項 | * ガンマグロブリン製剤の注射を受けたことがあるお子さんについての接種時期については、かかりつけ医と相談して下さい。（ガンマグロブリンは血液製剤の一種で A型肝炎等の感染症の予防目的や重症の感染症の治療目的などで注射することがあります。）
* 妊娠していることが明らかな人は接種ができません。
* 麻しん又は風しんのいずれかにかかった者にも、麻しん風しん混合ワクチンを使用することが可能とされています。
 |
| 副反応 | 副反応の主なものは、発熱と発疹です。他の副反応として、注射部位の発赤・腫脹（はれ）、硬結（しこり）などの局所反応、じんましん、リンパ節腫脹、関節痛、熱性けいれんなどがみられます。これまでの麻しんワクチン、風しんワクチンの副反応のデータからアナフィラキシー、血小板減少性紫斑病、脳炎、けいれんなどの副反応がまれに生じる可能性もあります。 |